

よろずは

平成二五年

十二月号

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。

歌碑めぐり 6

今回も万葉文化館の万葉庭園に建つ歌碑をご紹介します。

かすが
春日なる 三笠の山に 月の船出づ 遊士の 飲む酒杯に
影に見えつつ

(訳) 春日の三笠の山に船のような月が出た。風流な人々の飲む酒杯の中に、映って見えながら。(巻七・二一九五)

この歌は宴席で酒を飲みながら詠まれたのでしょうか。船のような形に欠けた三日月が杯のなかにも見えるとは、なんとも風流な表現ですね。月を船に喩える手法は他の万葉歌にも見られますが、それが杯のなかとうつりこむといった表現は類歌がありません。どんな人物が詠んだのか、わからないのが残念です。

歌碑の揮毫者は甫田鶏川氏です。石の階段のそばに建っています。この歌のように、風雅な気持ちをもって庭園をめぐるだけならば幸いです。

【万葉古代学係】

